

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号： 15401

研究種目： 奨励研究

研究期間： 2022～2022

課題番号： 22H04072

研究課題名 複式学級における外国語活動年間指導計画の検討-学習の質に着目して-

研究代表者

榎原 朱梨 (ENOHARA, Akari)

広島大学・附属東雲小学校・教諭

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 370,000円

研究成果の概要：複式学級における外国語活動年間指導計画の在り方について知見を得ることを目的に行った。圧縮版複式学級外国語活動年間指導計画に沿った授業を受けた複式学級児童と、文部科学省作成の学習指導案に沿った授業を受けた単式学級児童を対象に、聞き取りとスピーキングのパフォーマンステスト実施し、結果を比較することで学習効果の検証を行った。研究の結果、複式学級外国語活動年間指導計画を用いた授業では、一単元あたりの授業時数は単式学級に比べ、少なくなるが、2年に渡り、繰り返し学習を行うことにより、単式学級児童と同程度の学習効果が期待できることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

小学校英語教育において複式学級に関する研究は限られており、少人数学級であることや異学年がともに学習する環境であることなど複式学級ならではの特性を踏まえた年間指導計画の作成、指導の在り方など検討すべきことが多くある。その中、複式学級の特性を踏まえ開発した「複式学級外国語活動年間指導計画」に沿った授業による学習効果を検証した本研究は、今後の複式学級での英語教育において生かされる知見を得たという点で社会的意義があるものと考えられる。

研究分野： 英語教育

キーワード： 外国語活動 複式学級 年間指導計画

1. 研究の目的

小学校学習指導要領改訂に伴い、英語教育の教科化、時数の増加、低学年化されることとなった。第3・4学年では、「聞くこと」及び「話すこと[やりとり]」、「話すこと[発表]」の音声を中心とする外国語活動が実施されている。異学年がともに学ぶ複式学級においては、同単元同内容同程度A・B年度方式で授業が実施されることが多いが、英語学習初期段階である児童にとって系統的な学習ができなかったり、転出した際に1学年分の学習ができなかったりすることが起こりうる。そこで、2年分の学習内容を1年に圧縮し、2年にかけてスパイラルに指導する「東雲小版複式外国語活動年間指導計画」を作成した。しかし、本来2年で行う学習内容を1年に圧縮することで、文部科学省が作成した学習指導案と比べ、授業内容の質の低下や英語を聞いたり、話したりする量の減少が懸念される。

そこで、本研究では複式学級における複式版年間指導計画に沿った授業を受けた複式学級児童と文部科学省作成の学習指導案に沿った授業を受けた単式学級児童において、児童の聞くことや話すことに関する学習効果にどのような違いが生じるのかについて明らかにし、複式学級における外国語活動年間指導計画の在り方への知見を得ることを目的とした。

2. 研究成果

(1) 研究方法

本調査は、複式学級3年生児童(n=7)及び4年生児童(n=8)と、単式学級4年生児童(n=30)を対象とした。複式学級では筆者作成の複式学級年間指導計画に基づいた授業(3時間)、単式学級では文部科学省作成の学習指導案に基づいた授業(5時間)を実施し、単元終了後に、教員と1対1のやり取りをする方式で、聞き取りとスピーキングのパフォーマンステスト(全3問)を行った。なお、スピーキングのパフォーマンステストでは、平叙文及び疑問文の発話についてそれぞれ調査した。

(2) 研究結果

聞き取りテストでは、複式学級4年生児童全員、複式学級3年生児童7名中6名が全て正しく聞き取ることができていた。一方、単式学級4年生児童は、30名中19名の児童が全て正しく聞き取っていた。

次に、スピーキングテストにおける平叙文の発話では、単式学級4年生児童30名中18名の児童が自分の力で完全な文章を発話できていた。また、複式学級4年生児童も8名中7名が自分の力で完全な文章で正しく発話を行っていた。一方、複式学級3年生児童は、自分の力で完全な文章で発話できていたのは、2名にとどまり、残りの児童は教員のサポートをもとに正しく発話を行っていた。さらに、疑問文の発話に関しても単式学級4年生児童の30名中24名、複式学級4年生児童の8名中6名が自分の力で正しく発話することができていた一方で、複式学級3年生児童は、7名中3名のみが正しく発話できていた。

これらの結果から、リスニングについては一単元あたりの授業時数が少ない複式学級の授業においても一年目の学習で表現や単語を聞くということに十分に慣れ親しむことが可能であることが示唆された。スピーキングにおいては、単式学級4年生児童と複式学級3年生児童を比較すると得点に差が見られた。このことから複式学級3年生児童は、教員のサポートがあれば正しく発話することが可能であるが、自分の力で文章を正しく表出できるほど表現を定着させるためには時間が十分ではなかったと推察される。しかしながら、単式学級4年生児童と複式学級4年生児童を比較した場合には、得点に大きな差がなかったことから、一単元あたりの授業時数が単式学級での授業時数よりも少なくても、2年に渡り、繰り返し学習することで十分に表現を定着させることが可能であることが分かった。

以上のことから、複式学級外国語活動において2年の学習内容を1年に圧縮した複式学級年間指導計画を用いた授業においても、2年に渡り、繰り返し学習を行うことで、単式学級での学習と同じ学習効果が期待できることが明らかになった。しかしながら、本調査は、調査人数が限られており、一単元における学習の効果を検証した調査であった。今後は調査人数を増やしたり、一単元にとどまらず長期に渡る比較調査を行ったりすることで、複式学級におけるよりよい年間指導計画の在り方、指導の在り方を引き続き検討していきたい。

【参考文献】

文部科学省(2018)「新学習指導要領に対応した小学校外国語教育新教材について」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/123/houkoku/1382162.htm

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
松宮 奈賀子	(MATSUMIYA Nagako)